

THE SCARLET LETTER、 日本における最初の翻訳『緋文字』と富永蕃江

鈴木 進

外国文学の翻訳に関して、本邦初訳はどれかを定めるのは容易なことではない。ナサニエル・ホーソーンの文学作品のうち、日本における最初の翻訳は、明治22年1月、大島正健による「夢ならぬ夢」(『女学雑誌』第143.4号に載った“David Swan”の訳)、とされている。それでは *THE SCARLET LETTER* を日本で最初に翻訳したのは誰れか、そしてそれはいつのことか。筆者の知る限り、最も早いと思われる年代に明治35(1903)年、内田貢の名前をあげる研究書がある¹⁾。その書物には翻訳出版の年と訳者名だけしか記されていないが、内田訳説の根拠はおそらく内田貢(魯庵)の『鳥類好語』(警醒社書店、明治26年出版)の凡例中の次の一文にあったのではないかと推測される。「本編に載せんとして紙数の都合に依り第二編に譲りしもの即ちアービング、ホーソーン、ヴォルテール、トオルストイ等」とあるが、「結局は第二編は出版されなかった」²⁾のである。翻訳家としての内田がホーソーンに興味を示したことは、広く知られているが、*THE SCARLET LETTER* の訳は『内田魯庵全集』の翻訳小説集の中に入っていないし、同全集の年譜にも、この小説の翻訳に触れた項目は一行もない³⁾。さらに『鳥類好語』というのは本来外国文学の翻訳短編小説集であったことから、ホーソーンの短編小説の一つを載せるというのなら理解できるが、*THE SCARLET LETTER* の翻訳が収録されたというのは分量からいっても不自然に思われる。いずれにしても *THE SCARLET LETTER*、内田貢訳は出版されなかったと考えて差し支えなからう。

明治36(1903)年に、東京東文館から富永蕃江訳『緋文字』が出版された。四六判、本文249ページ。黒地の表紙に白抜き、右横書き『緋文字』のタイトルがあり、大きく赤字で「A」の文字。その下に東京、東文館と白抜き二行で

記されている。中表紙には SCARLET LETTER (赤字)、BY NATHANIEL HAWTHORNE (黒字)、その下に縦書き「荒磯」「ロモラ」著者富永蕃江訳、中央に赤字で小説「緋文字」、その左横に東京東文館とある。口絵はホーソンの肖像、その下に「なさにえる、ほーそるん」とひらがなで記されている。次に訳者の小引(序文)、本文が続き、最後のページに発行者による訳者紹介が一言、そして奥付。これが本の体裁である。このように日本における *THE SCARLET LETTER* 翻訳の歴史は富永蕃江訳『緋文字』をもって嚆矢とする、と筆者は考える。*THE SCARLET LETTER* がボストンの Ticknor, Reed, and Fields 社より出版されてから、日本語訳は53年後のことである。

筆者は本稿においてこのことを前提に以下4つの視点から考えてみたい。

- (1)、『緋文字』の訳者富永蕃江という人物、特に彼の英語学習と *THE SCARLET LETTER* の翻訳について、
- (2)、富永の *THE SCARLET LETTER* との出会いと翻訳の動機について、
- (3)、富永訳『緋文字』に対する出版当時の読書界の反応について、
- (4)、日本における *THE SCARLET LETTER* 翻訳史における富永訳『緋文字』の位置づけについて。

最初に富永の生涯を辞典風に述べてみよう。

富永蕃江、本名徳磨は明治8(1875)年10月19日、大分県南海部郡佐伯町に生まれた。16歳の時に佐伯メソジスト教会にて、米、ノースキャロライナ州出身の南メソジスト教会ウィルソン宣教師より受洗し、キリスト教信徒となる。22歳にして日本基督教会伝道師の准允を受けた後、群馬県伊勢崎教会(補教師)、さらに明治36(1903)年には、正教師として石川県金沢石浦町教会(現日本基督教団金沢教会)、第五代牧師に就任する。同教会辞任後上京し、東京神学社にて系統神学を講じる。32歳の時(1907年)、超教派独立駒込基督会を創設。大正14(1925)年、新共同神学院を設立し、伝道と神学教育及び著作活動に専念する。昭和5(1930)年、55歳にて歿。著書に『基督教の根本問題』、『有神論大系』等の大著があり、日本のキリスト教界ではよく知られた人物であった。

しかし富永と文学の関係でいえば他の誰よりも国木田独歩の名前をあげなくてはなるまい。独歩は明治26(1893)年9月から27年8月まで、大分県佐伯の鶴谷学館の英語及び数学の教師を勤めている。一方富永徳磨は明治23(1890)年より26年まで、それは富永にとっては最終学歴となる鶴谷学館に学び、ここに二人の師弟関係が生まれる。独歩の『欺かざるの記』(明治26(1893)年よ

り30（97）年に至る日記文学）には佐伯時代から上京後を含めて徳磨の名前が56回も現れてくる。この事実からも、一時期師弟として、後には友人としての二人の間柄を伺い知ることが出来る。

独歩が教え、富永の英語学習の出発点となった鶴谷学館とは如何なる学校であり、またそこでの英語教育はどのようなであったか。鶴谷学館は旧藩校に代わる高等補習機関として同地に明治23（1890）年頃設置され、29年頃には廃止となった私塾である。学館は佐伯小学校に併置されていて社会人を対象に、午後3時半より5時半までと、午後8時半より10時半までの二部授業が行われた。学科目は英語、数学、漢文の3科目の他に剣道、理科も教えられたが英語が特に重視されたという。

鶴谷学館における英語教育については、使われたテキストなどからその程度を推測してみよう。『欺かざるの記』、明治26年10月5日の記事は独歩の鶴谷学館着任直後のものであるが、英語の授業について次のような興味深い内容を伝えている。「昨日より始めて授業す、三時半（午後）より下級生の為めにナショナル読本二の巻を授く^(ママ)四時半よりリーディングを授く、午後八時半より代数学を授く、九時半より上級生の為めにスキントン万国史を講ず」とある。この万国史（原書）の講義はフランス革命の項より始められた。富永はこれをもっともよく理解するだけの語学力と思想を有していたという。独歩は27年3月2日の記事に「カーライル『英雄論』を読む。「ヘスチング論」を了はりて教科書として近日より用ゆる事となる也」と記している。独歩が鶴谷学館に着任した年、富永は学館生徒4年目に当たるので、当然英語も上級クラスに属していた筈である。従ってその頃の富永はCarlyleのON HEROES AND HERO-WORSHIPが理解できる英語力をもっていたものと想像される。

明治27年9月、富永は独歩に従って同志とともに上京する。文筆により身を立てようとして、徳富蘇峰の民友社入社が夢が叶うが、何らかの事情によってすぐに退職している。同じ年の11月、今度は福音新報社に入り、また一番町教会に出席することになり、その後の富永の人生を決定する植村正久との関係が生まれるのである。彼はその後の数年間植村の主宰する『福音新報』に関わりながら、「恐ろしいほどの猛努力」によって、勉強を続けることになる。植村の紹介を受けた富永は明治学院の図書館の利用が許され、神学、聖書学、哲学、社会思想史、さらにギリシャ語、ラテン語までも自学自習したという。

それらの勉強の成果が明治30年、富永最初の外国文学の翻訳として日の目を

見ることになる。明治30（1897）年1月22日発行の『福音新報』第82号に「白百合」其ノ一、某訳、が載る。これはジョージ・エリオットの *ROMOLA* の梗概訳で、同誌に連載されたものが6年後に『山崩と百合』という邦題で民友社から出版されることになる。『福音新報』掲載時の訳者名が某となっているのは、植村がその時点ではまだ富永の名前を出すことを許さなかったのではないだろうか。しかし22歳の富永はこの時すでにジョージ・エリオットを翻訳するだけの英語力を身につけていたものと思われる。そして次の金沢時代には *THE SCARLET LETTER* の翻訳書を世に問うている。

それでは富永と *THE SCARLET LETTER* との出会いはいつ、どこにおいてであったのか。この問題を考える際に、富永が前述の二つの英米文学作品、*ROMOLA* と *THE SCARLET LETTER* をなぜ選んだのか、特にエリオットの数ある作品の中で、なぜ *ROMOLA* でなければならなかったのかという疑問が生じる。そのことに関する答は、広く明治期の英学生が用いた一冊の英語教科書にあった。それはアメリカより輸入された William Swinton の *STUDIES IN ENGLISH LITERATURE*、日本でも翻刻版が出され、スキントン『英文学史』としてよく知られたものである。この教科書の第31章に *THE SCARLET LETTER* の“The Prison Door”および“The Market Place”が、そして少し後の第35章には *ROMOLA* からの抜粋と、両作品とも載っているのである。富永の師である独歩は東京専門学校においてスキントンを習っている。同校の明治23年5月の課程表によれば英文学第一級スキントン氏英米大家文集、テイン氏英文学史⁴⁾とある。鶴谷学館時代に独歩がこの教科書を教えたか、または紹介したのかについては記録がないが、恐らく富永が前述の二つの英米小説に出会ったのはスキントンの『英文学史』においてであったとあって間違いないであろう。

ところで富永は *THE SCARLET LETTER* をいつ頃翻訳したのであるだろうか。東文館発行『緋文字』の序文にあたる小引には「明治36年10月金沢にて」と記されている。富永が伊勢崎教会を辞任して、金沢石浦町教会に赴任したのは同年の1月2日であった。『金沢教会百十年史』によれば富永牧師は着任直後から势力的に教会の組織作りに取り組んでいたことがわかる。伝道と牧会の多忙の中で *THE SCARLET LETTER* の翻訳をも行い、同年11月に『緋文字』と題して出版したのであるだろうか。

しかしこのことを調べている中で筆者は、富永訳『緋文字』が東文館から書物の形をとって出る以前に、富永の関わっていた『福音新報』誌に訳が連載さ

れていたことを知った。『福音新報』第398号（明治36年2月12日発行）、文学欄に載った「緋文字 ホーソルン著『スカーレット・レタァ』の翻訳、蕃江生、第一回、「獄の前」がそれである。以後第二回、市場が399号（2月19日発行）、第三回、沈黙、400号（2月26日発行）、第四回、会見、401号（3月5日発行）、第五回、針仕事、402号（3月12日）、第五回、眞珠、403号（3月19日）、第七回、誰が子、404号（3月26日）、と続きこの連載は第十四回、心の負債、414号（36年6月4日発行）で打切りとなっている。原作でいえばChapter XVIの“A Forest Walk”の章までである。連載を中断した理由は明らかでないが『福音新報』第442号（36年12月17日発行）の新刊案内欄には『緋文字』出版を知らせる次の記事が見られる。「是れ我が福音新報に於て其の前半を訳載せしものなり、読者は既に如何に訳文の忠実にして而も高尚なるかを知れるならん。今ま全篇を訳し了りて一冊となす我社は此に贅言せざるべきが只だ尠かる小説の我が読書界に歓迎されん事を希望して止まざるものとす…」との推薦文が載っている。

富永は雑誌連載の中断から10月までのわずか4ヵ月の間に、残りの8章を訳し終えて一冊の訳書として出版したのであろうか。あるいは全体の訳文は金沢に来る前に出来ていて、金沢からは雑誌というスペースの限られた紙数に合わせ、ある時は原文の章にとらわれずにダイジェストとして一回ずつ『福音新報』社に送ったのであろうか。富永は生涯にわたり丹念に日記を書き続け、それらは彼の著作物、説教原稿等と共に東京神学大学図書館に所蔵されているが、そのうち伊勢崎、金沢時代のものが欠けているというので、『緋文字』翻訳の時期につき特定することができなかった。

『福音新報』に載った翻訳についてはもうひとつの疑問が残る。その翻訳を東文館『緋文字』のそれと比べてみると、二つの訳文に明らかに違いが見られるからである。試みに『福音新報』の訳文と東文館版『緋文字』のそれを比較してみよう。『福音新報』の第一回、獄の前の訳には原文の第一パラグラフがそっくり省かれ、いきなり次のような始まる。

始めて新世界に殖民して、此に理想国を造らんとしたる清教徒の胸中には、其の理想国に死あり罪あることを期したりや否やは知らねど、然も實際の必要は遠慮なく迫り来りて、まだ開闢されぬ初穂の土地をば、一部を墓地に一部を獄の敷地に割かざるを得ざらしめたるぞ是非もなき…。(原文は縦書き、

漢字に読み仮名付き)。

これに対して東文館『緋文字』は「鬚生やしたる一群の人々は、中に婦人をも雑へて木造の大厦の前、鉄の大鋌うてる巖めしき檜木の門扉に面して集り居たり。(中略)」と原文を忠実に訳している。第二段落が上記の『福音新報』からの引用部分に当たる次の訳文である。

新たに殖民地を新世界に立てし人々は、徳義幸福の如何なる理想国を造らんと夢みしか知らねども、人住む處必ず死あり罪あり、未だ幾何も経ざる内、何所も言い合はせたらんやうに、早くも新墾の土地を割て、一部をば墓地に、一部をば獄の敷地に用ひざるを得ざる事となりぬ。(原文は縦書き、漢字には読み仮名が添えられている)。

この訳には「人住む處必ず死あり罪あり」という原文にはない語句を挿入して、読者の理解を助けようという意図も伺われるが、全体にわたり『福音新報』の時の訳文とは大きく違っていることがわかる。富永は書物にする段階でもう一度訳をし直したのであろうか。これに関しても不明である。

さて『緋文字』翻訳の富永の動機は何であったか。この問いに富永自身が直接述べたものはないが、原作者ホーソンの清教徒的なものへの共感、神を畏敬する姿勢、それらを「訳して邦人に伝」えようと苦心した旨の言葉が小引に見ることが出来る。福原麟太郎の『日本の英語』の中での指摘のごとく、富永もまた当時のキリスト教会牧師一般のように、牧師としてホーソンを用い、英米の文明を紹介し、キリスト教道徳を伝えようとしたのでないだろうか。特に富永の生き方を貫くピューリタンの倫理観は、自己に対して極めて厳しく、教会にあっては牧師として男女の交際恋愛結婚の問題につきいささかの間違いも赦さなかったといわれている。文学者としての富永もまた「自分の目指す文学はレリジャス・ビーイングを基底とし、社会を高尚にし聖化する宗教的文学活動⁵⁾」であると書き記している。そのような意味で『緋文字』の物語こそ、富永にとって格好の作品であり、翻訳紹介に労をいとわなかったのではないだろうか。

それでは富永訳『緋文字』に対する読書界の反応はどのようなであったか。このことを探るひとつとして、当時の文学雑誌『帝国文学』にそれをみてみよう。

富永訳が東京東文館から出版されたのは、前に述べた通り明治36年11月6日のことであった。その一ヵ月後、12月10日発行の『帝国文学』第9巻第12号にいち早く同翻訳の書評が出た。評者の署名は記されていないが、佐藤孝己氏によれば、それは編集委員の一人、斎藤野の人によるものであるという。斎藤であるとなれば彼は高山樗牛の実弟、斎藤信策であって、東京帝大独文科出身の評論家である。『帝国文学』が富永による翻訳を取り上げたのはこれが最初のことではない。明治35年6月号の『帝国文学』は、同じ富永の手による翻訳『雪崩と百合』（1903年）が、梗概訳であったにもかかわらず次のように好意的な批評を載せている。「…文章は（中略）すらすらしたる蹊路、錯綜したる事件の跡を追うて思わず卒読せしむ。梗概的小著としては十分に成功せる者と評すべし」と。これに反して翌年の『緋文字』に対する批評はまったくの酷評であった。

その評の論旨は次のように要約することができよう。

- (1) *THE SCARLET LETTER* という作品はストーリーよりも「辞句の間」の「暗澹の気」が肝心の要素である。それを粗筋を追うように訳してしまったのは、日本の読者にホーソーンの文学を誤解させる恐れがある。
- (2) 全篇意識にすぎず、完訳でない。「平々凡々新聞紙の三面」記事を読むようである。
- (3) 大切な語句を訳さずに済ませ、また英文を誤って解釈している、として4箇所をとりあげ例証している。
- (4) 出版社、発行者が「訳者の意を充たす能はざる所一切発行者の責任なり」とあとがきに書いているのは「ナンセンス」であると批難している。

上記(3)に指摘されている箇所を少し詳しくみてみよう。先ず評者が「訳者の全然原書の深遠なる意味を解釈し得ざる」といっている“The Market Place”の中の次の箇所についてである。引用された原文は“Here, there was the taint of deepest siu in the most Sacred quality of human life, working snch effect, that the world was only the darker for the womaus beauty, and the more lost for the infant that she had borne.”

富永訳にはこの前の箇所の訳「ここに人間天性の最も神聖なるもの、極めて深き罪に汚がされ、なまじひに此女の美なるが為め、此幼児のあるが為めにいとゞ世界の暗黒にして、罪障なるを思はしむ」がある。この訳文について、訳者は「最も簡勁緊切の語句」を上のように「訳し果てた」と批難されている。

『帝国文学』誌の批評欄は紙数に制限があるためか、引用文だけでは評者の主張が十分に伝わってこない。われわれは評者の言わんとするところを推し量り、指摘箇所を前後を、富永訳によって補い考えてみよう。この場面は、獄から引き出され、衆人環視の中で、処刑台に立たされたヘスターの姿が「容貌服装両つながら絵にて見まほしき一人の美女、胸に幼児を抱けると見て幾多の名画工が互に競いて描きたりし聖画の図を想起せしならん、而も唯想起するのみ、世の罪を贖ひし『幼児』の罪なき母と対照してえた思ひ当るならん」、この文に続いて上の引用箇所があるのである。つまりこのところの原文の言わんとする要点は、女性が新しい生命を生むという、本来人間の最も神聖であるべき母性の関係が、ヘスターの場合は聖母と救い主、幼な児イエスの姿とは対照的に、姦通という深い罪の中になされた。ヘスターが美しい女性であるがゆえに、なおのこと罪による暗さが増し、さらに腕の中の罪の証であるパールを生んだがゆえにそれだけ人間世界が墮落する結果になった、というほどの内容であろう。富永訳に多少明確でない語句が見られるとしても、批評子の言う「原書の深遠なる意味を解釈し得ざる」と言い切るほど非難される訳文であろうか。

『帝国文学』の批評子が指摘する次の二箇所が誤りであるのは誰れの目にも明らかである。先ず“The Recognition”の中の“and dewy purity of thought...”これを富永が「清らかなる露の色の四辺を払へり」としたのは「畢意無意義の誤訳ならずや」といっている。ここでは牧師デイズデイルの人間性が問題になっているのであって、彼は朝露のように純粋な考え方の持主であるとの比喩であるのだ。富永訳はその意を伝えていない。

同じように次の訳文も『帝国文学』の指摘通り誤訳である。「小官は之を逐ひ出す力足らざるなり」。これは“The Interview”の章の初めの箇所で、処刑台の上での恥辱と、Aの文字を生涯胸に縫いつけるべしという刑を受けたヘスターが獄舎に戻ったところの場面である。異常な興奮状態にあるヘスターと嬰兒の身に危険を感じた獄吏ブラケットが、医者と称する男を獄に招き入れる。獄吏はむちを使ってあの悪魔にとりつかれたような女からサタンをたたき出そうとして、打つべき手は打った、やるべきことは全部やった、私の責任に欠けるところはない、と言訳するところである。『帝国文学』には“and there lacks little, that should take in hand...”^(ママ)だけしか引用されていないが、原文はその後“to drive Satan out of her with stripes”と続くのであり、引用としてはこの部分をも加えた方が評の趣旨が明確になったであろうと思われる。富

永はこの箇所での take in hand の慣用句が “take the charge or responsibility” の意味であると知らなかったのであろうか。また “there lacks little,” は「欠けたるもの、不足するものはほとんどない」と読まなければいけなかったのである。

『帝国文学』の評が問題にしているもうひとつの箇所は原作の “That mystery of a woman’s soul, so sacred even in its pollution.” の文で、これを「平然と脱却せしは何等の不注意ぞや」と咎めている。この箇所は富永が “The Recognition” を「認知（みしり）」と訳す章の後半の次のような場面である。引用部は処刑台に立たされたヘスターが姦通の相手、赤子の父親の名前を決して明かそうとしないと見て取ったウィルソン牧師と総督がディムズデイルに促す次の文に続く部分である。“Such was the young man whom the Reverend Mr. Willson and the Governor had introduced so openly to the public notice, bidding him speak, in the hearing of all men, to...” 富永訳にはこれに当たる訳文も見当たらない。この6行からなるパラグラフでは最後の一文を「青年牧師は斯かる地位に立ちしこと、て全く血色を失い其の唇を戦かせ居りしが」としか訳しておらず、しかもこの訳文は次の新たな段落の最初の文として用いられている。しかし『帝国文学』が指摘するこの箇所こそ、ホーソーンの、他人の心の聖域を犯かす “unpardonable sin” の思想に繋がる重要なキー・センテンスであり、その訳を省いてしまった富永の読み方は、当時としては止むを得なかったとしても、「ホーソーンを誤解させる恐れ」との批評には頷ける。

富永訳には前述の『帝国文学』の指摘のように(1)語学的誤り、意味の取り違い、(2)ホーソーン文学の真髄を含む大切な文の省略、そして『帝国文学』の指摘にはないが(3)語学的な問題であると同時にアメリカ植民地史や文化的背景の知識不足から生じる誤り、この三種類が見られる。

(3)の文化的背景に関わる例をひとつだけあげると、第八回、「幼児と牧師」の章の最後の場面で、ヒビズ夫人がヘスターに声を掛ける箇所を富永訳は「今宵我等と共に森に行かずや。愉快なる一友人に会ふべし。我は希土帖弗蘭も我等の仲間の一人なるべしとその黒人に殆ど約束し置きたり」と言ふ。希土帖は勝利の笑を浮べ、「其人によろしく断りくれ玉へ。妾は今宵家に在りて眞珠子を護らざるべからず。若し人々眞珠子を奪いしならば妾は喜んで森に行き、其の黒人の書物に署名し、我が血を以って印を押すべかりしなり」(下線、筆者)、となっている。ここに訳された「黒人」に相当する原語は “the Black Man”

である。しかしこの二箇所は定冠詞が付き、大文字の B と M で始まる単語であり、さらに文脈からも、通常 African-American を指す上の訳語は誤りで、ここは devil の意味に訳さなくてはなるまい。

『帝国文学』の評が前述の(4)の発行者に対する批難として巻末の断り書きを問題にするのならば、それはむしろ次の点にこそ当てはまるのではないだろうか。東文館版『緋文字』にはなぜか二箇所において重複した章がある。先ず「第三回、認知り」の次に同じく「第三回、会見」の章が来ている。原文は Chapter IV Interview であるから、「会見」の方は良いとして、「第三回」とあるのは「第四回」とすべきであった。「第三回」が二度つづきその次には「第四回、針仕事」がきている。これも原文では Chapter V Hester at her needle であるから、ここにも章のずれが見られる。また「第十二回、牧師の通夜」の次にもう一度「第十二回、またも希土帖について」がきている。原作では Chapter XIII Another View of Hester であるから、この章は「第十三回」でなくてはならない。これらは数字の順序を踏まない単純な誤りに過ぎないが、たとい富永が「文士の独立を尊び、(中略)漫に加筆を喜ばず赤裸々を以て世波に投ずるを優れりとす」といえど、編集出版者の責任によって妨ぐことが出来た筈の誤りであった。

だが『帝国文学』の「該書はこの宣教師が胸中に蟠まれる罪業の煩悶を写すを主とせしものから、果てし恋愛談の後日物語とも見るべき一種悲痛の心理小説にして…」という評者はホーソーンの原作をかなり正しく読んでいたことを示していると言えよう。つまり *THE SCARLET LETTER* という小説は姦通の過程が問題なのではなくて、姦通はすでに済んでいるところを出発点として、姦通を犯したことからくる苦悩、心理を描くことに力点をおく作品という意味で『帝国文学』の評者は優れた読み手であったといえよう。

『帝国文学』に蕃江訳『緋文字』の書評を書いたと考えられる斎藤信策は独文専攻であったが、帝大で小泉八雲の英文学講座を聴講し、八雲を通してホーソーンに親しんでいたと思われる⁶⁾。明治37年12月号の『帝国文学』(第10巻12号)はホーソーン生誕百年特集を組むが、斎藤はここでもホーソーン作品の罪の問題を論じている。そのような斎藤が蕃江訳『緋文字』の出版を「本邦現代の文学界の為め少なからぬ貢献」するものと、期待し「一読」した上での批評であると記している。富永訳はそれに答えてないというのであるが、しかしわれわれは富永が対象とした読者はどのような人たちであったかということにも

目を向けなくてはならないのではないか。斎藤の言う『帝国文学』の読者層（彼らの中には翻訳によらずに原文でホーソンが読める人たちがいた筈である）以外にも、広く翻訳紹介の需要があったと思われる。彼らの多くは、当時の日本の読者一般の好みと同じように、逐語訳よりはむしろ原作の筋を追うことで満足した人たちであったに違いない。明治期に翻案小説や翻案劇が多数生まれたのと相通じることではないだろうか。一方翻訳する側にもそのような読者の反応に答えようとする者もいた。先に述べた内田貢（魯庵）は明治43年8月発表の「翻訳文と文章の進歩発展」の中で「ホーソンの『スカレット・レター』は所謂心理小説としては、近代のもの、中で立派な作品である。これとても細かに漏れなく翻訳したならば、日本の読者には恐らく顧みられまい」と述べているのはこの間の事情をよく物語っている言葉であるまいか。

ホーソンは元来ロマンス作家であるから *THE SCARLET LETTER* においても、ロマンス小説の常として、原文には過剰と思われる関連事項、語り手による詳細な解説が多く見られる。もしそれらが忠実に訳されたならば、辟易させられる読者も当時はいたとと思われる。翻訳家魯庵は先の文に続けて「日本に翻訳されたもので、(中略)十分手際よく訳し得たところで、日本の読者には向かない。まず抄訳ぐらゐな所が相当だろう」と付け加えている。富永訳『緋文字』は『帝国文学』の「全篇殆ど意識」との指摘を待つまでもなく、明治期の訳書によく見られる「縮訳」、あるいは「抄訳」と呼ぶのが正しい。そうなった理由のひとつは、訳書としての形をとる以前に『福音新報』という雑誌に半分以上が掲載されたこととの関連も考えられないことではない。

THE SCARLET LETTER の「完訳」ということに関して言えば、原作本文の前におかれたあの異常に長い“The Custom House”の訳を含めるかどうかについて考えなくてはなるまい。この序章には、フィクションではあるが、作者によってストーリーの主題に繋がる緋色の布地のAと、その謂れを記したPueの記録との出会いが述べられている。さらにこれが“moonlight in a familiar room”の作用によって、読者を「事実と虚構への橋渡し」「neutral territory」へといざなう⁷⁾序文であるのだから、「税関」の章の有無によって読み方、理解に大きな違いが生じてくる。富永訳には、前述のように当時の読者層一般への配慮によるためか、さらには本文のストーリーを追うことに直接は繋がらないとの理解によるものか、“Custom House”の訳は省かれている。ただし富永は『緋文字』小引の中に、作者が「赤布にて製したるA字」と出会ったいき

さつを短く紹介するのを忘れてはいない。

最後に *THE SCARLET LETTER* 邦訳の歴史における蕃江訳『緋文字』のもつ意義につき述べて、本稿の締め括りとしよう。筆者の調査では *THE SCARLET LETTER* の邦訳は今日までに14名の訳者により翻訳出版されている。その初期においてはこの作品の読者は主にキリスト教界その他少数の人々に限られていたが、その後は広く一般読者層を得て、長く読みつづけられてきた。それはホーソンとほぼ同時代に日本に紹介されたアメリカの詩人、作家など、例えば人気の高かったロングフェロー、ホームズなどのその後を振り返ってみると違いは明らかであろう。

なお、これまで出版された14種類の訳書のうち富永訳だけが文語体訳であったことも記憶しておきたい。富永の訳が古い時代のものであったからということだけではない。むしろ富永は山田美妙や二葉亭四迷などの言文一致の動きを十分承知していた。それゆえ、外国文学の翻訳に取り組む以前の4つの創作小説はみな言文一致、会話体で書いている。しかし富永の高弟林検治の推測のように、*THE SCARLET LETTER* に描かれた17世紀ニュー・イングランド・ピューリタン社会とホーソンの原文を日本語で表現するには文語体をもってするのが「原著のエスプリをありのままに伝えるのに最もふさわしい」⁸⁾との富永の見識によるものであろう。

THE SCARLET LETTER を読もうにも原文しかなかった時代に、それがたとい抄訳であっても、当時の一般読者層に、この小説に近づく道を開いた富永徳磨の訳業は高く評価されよう。これまで述べたように富永の英語学習はすべて独学によるものであり、文学は伝道のための手段であったのだ。その富永の翻訳に、文学としての欠陥や語学的誤りを指摘するのは難しいことではないかもしれない。しかし何よりも日本における *THE SCARLET LETTER* 翻訳史の先駆的役割をこの富永蕃江訳『緋文字』が果たし、それに続く先達たちの努力により、今日の『緋文字』邦訳もあることを忘れてはなるまい。

THE SCARLET LETTER の原作者ナサニエル・ホーソンは1804年の生まれであり、富永訳『緋文字』出版が明治36年であった。翌年37(1904)年はホーソン生誕百年に当たる。我が国におけるその記念碑には、図らずも富永蕃江『緋文字』邦訳という花が添えられたと言ってよかろう。

〔注〕

- 1) 坂本重武『ホーソーンの文学』、220頁（竹村出版）、1970年
- 2) 野村喬『内田魯庵傳』、137頁（リプロポート）
- 3) 野村喬編『内田魯庵全集』（ゆまに書房）
- 4) 佐藤孝己「日本におけるホーソーンの浸透」『比較文学』第6巻、80頁（日本比較文学会）
- 5) 林検治編『富永徳磨先生記念文集』、103頁（富永会）
- 6) 小田切進編『日本近代文学大辞典』第二巻、74頁（講談社）
- 7) 西前孝『記号の氾濫』、14頁（旺史社）
- 8) 林検治編『富永徳磨先生記念文集』、167頁（富永会）

参考書目

Eliot, George. *ROMOLA*. Penguin Classics, 1996

Carlyle, Thomas. *ON HEROES AND HERO-WORSHIP*. Oxford Univ. Press, 1957

佐藤孝己、「日本におけるホーソン文献」『比較文学』第11巻、日本比較文学会、昭和38年

佐藤孝己、「ホーソン」、『欧米文学と日本近代文学』、教育出版センター、昭和49年

佐渡谷重信、『近代文学の成立』、明治書院、1997年

塩田良平編、『定本国木田独歩全集』、学習研究社、1967年

重久篤太郎、「緋文字 邦訳書目」、『主流』、同志社英文学会、昭和36年

高梨、出来監修、*NEW NATIONAL SECOND READER*、大空社、1992年

田中保、「ホーソン移入考」、『トワイス・トールド・テールズ』（上巻）、桐原書店、1981年

林検治編、『キリストの新精神』、新教出版社、昭和45年

Hawthorne, Nathaniel. *THE SCARLET LETTER*. (The Century Edition), Ohio State Univ. Press. 1962

資料

The Scarlet Letter 邦訳書目

| (西暦) | (元号) | (邦訳題名) | (訳者) | (出版社名) | (記事) |
|------|------|------------|-------|-----------|--|
| 1903 | 明治36 | 緋文字 | 富永蕃江 | 東文館 | 文語訳、「小引」のなかで“The Custom House”につき触れている。 |
| 1917 | 大正6 | 緋文字 | 佐藤 清 | 日本基督教興文協会 | 「税関」の訳なし |
| 1923 | 12 | スカーレット・レター | 神 芳郎 | 精華堂書店 | 「税関」の訳なし |
| 1927 | 昭和2 | 緋の文字 | 馬場孤蝶 | 国民文庫刊行会 | 世界名作大観 第14巻、“The Custom House”を「税関」と訳した最初の完訳 |
| 1929 | 4 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 新潮社 | 世界文学全集11、ポオ傑作集、緋文字其の他、「税関」なし |
| 1929 | 4 | 緋文字 | 佐藤 清 | 岩波書店 | 岩波文庫 |
| 1940 | 15 | 改版緋文字 | 佐藤 清 | 岩波書店 | 岩波文庫、改訳 |
| 1947 | 22 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 大泉書店 | 新選世界文学集39 |
| 1948 | 23 | 緋文字 | 村上至孝 | 世界文学社 | 世界文学叢書39、The Scarlet Letter 第二版「はしがき」の訳および「税関」の訳あり |
| 1950 | 25 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 河出書房 | 世界文学全集第20巻第一期19世紀、ホーソーン、マーク・トウエーン集のうち、「税関」なし |
| 1951 | 26 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 三笠書房 | 世界文学選書91、逐語訳または直訳本 |
| 1952 | 27 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 角川書店 | 角川文庫、昭和43年 第30版には「税関」が入る |
| 1953 | 28 | 緋文字 | 泉 春夫 | 創人社 | 原書第二版「はしがき」および「税関」の訳あり |
| 1954 | 29 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 白水社 | 世界名作選 |
| 1955 | 30 | 改訳緋文字 | 佐藤 清 | 岩波書店 | 岩波文庫、「税関」抜粋、解説の中にあり |

| | | | | | |
|------|------|-----|---------------|--------|--|
| 1956 | 昭和31 | 緋文字 | 太田三郎 | 河出書房 | 河出文庫、「税関」なし |
| 1957 | 32 | 緋文字 | 鈴木重吉 | 新潮社 | 新潮文庫、「税関」なし |
| 1959 | 34 | 緋文字 | 太田三郎 | 河出書房新社 | 世界文学全集第三期9、 ホーソン緋文字「税関」 訳あり |
| 1959 | 34 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 平凡社 | 世界文学全集10、緋文字、 にんじん、「税関」あり |
| 1961 | 36 | 緋文字 | 太田三郎 | 河出書房新社 | 世界文学全集24、ホー ソン緋文字、「税関」 あり |
| 1963 | 38 | 緋文字 | 鈴木重吉 | 新潮社 | 世界文学全集46、緋文字、 黒猫、ねじの回転、最後 の一葉 |
| 1965 | 40 | 緋文字 | 太田三郎 | 河出書房新社 | グリーン版世界文学全集 11 |
| 1967 | 42 | 緋文字 | 刈田元司 | 旺文社 | 旺文社文庫、「税関」あ り |
| 1968 | 43 | 緋文字 | 太田三郎 | 河出書房新社 | カラー版世界文学全集13 巻、ポー黒猫、モルグ街 の殺人他、ホーソン緋 文字、挿し絵（グラハム、 トムソン）入り |
| 1969 | 44 | 緋文字 | 大井浩二 | 講談社 | 世界文学全集14、「税 関」なし |
| 1970 | 45 | 緋文字 | 小津次郎 大橋健三郎 | 集英社 | 世界文学全集17、緋文字、 美の芸術家他、原書「第 二版への序」訳あり |
| 1971 | 46 | 緋文字 | 工藤昭雄 | 中央公論社 | 新集世界の文学7、ホー ソン、ポーのうち、「税 関」あり |
| 1978 | 53 | 緋文字 | 刈田元司 | 主婦の友社 | キリスト教文学の世界20、 ホーソン、アン・ポー ター、メルヴィル |
| 1991 | 平成3 | 緋文字 | 小津次郎 | 集英社 | 集英社ギャラリー「世界 の文学」16、アメリカI |

| | | | | | |
|------|------|-------|-------|-------|-------------------------|
| 1992 | 平成 4 | 完訳緋文字 | 八木敏雄 | 岩波書店 | 岩波文庫、原書「第二版への序文」、「税関」あり |
| 1994 | 6 | 緋文字 | 工藤昭雄 | 中央公論社 | 新装世界の文学コレクション12、ホーソン、ポー |
| 1996 | 8 | 緋文字 | 福原麟太郎 | 角川書店 | 角川文庫リバイバル、再版 |

(本稿は1999年8月、日本英学史学会、北陸、東日本支部合同長野大会での発表原稿に加筆したものである。発表に際し、佐藤孝己先生、草村美牧師から資料提供、助言を得たことに対し深謝いたしたい)